鳥ト踊る

ノゾエ征爾

○登場人物○

男

女

林先輩

［序章］

ピアノの音。
とても華麗な演奏。
女が、扇風機に髪の毛を絡み取られ、身動きの取れない状態で立っている。
扇風機は、壁の上部、地上3メートル弱ほどの所に、設置されている。
つまり、女の髪は、相当に長いとみられる。

［1］

ピアノの音アウト。
髪が絡まり、身動きのとれない女。
傍に、男が立っている。
男の傍には、ビールケース程の小さな台が一台。

男　（自分）男じゃないですか。（相手）女じゃないですか。
カップルだったんですね。
女　ある時、ひょんなことから中身が入れ替わったんです。
男　中身？
女　そう、中身。だから例えば、あなたの中身が僕になって、
僕の中身があなたになったっていう。
男　映画とかでよくあるような…？
女　映画とかでよくあるような？
男　ぶつかった拍子に、男の子と女の子の中身が入れ替わるみたいな。
女　…。
男　大林宣彦の「転校生」とか。
女　…
男　尾道三部作。
女　…
男　尾美としのり、小林聡美。
女　……。
男　すいません、なんでもないです。
女　いえ。で、中身が入れ替わっちゃって、そうすると、何が見えると思います？
男　どういうことですか？
女　いや、中身が入れ替わったら。だから、あなたの中身が今、僕に入ってます。はい、何が見えますか？

女　……？
男　想像想像。想像です。
女　んー…
男　想像想像ー
女　あ、
男　自分の姿が見えているんですよ。分かります？　あなたの中身だけが僕に入っているわけですから、見えているのは、自分の姿なんです。で、そういう入れ替わった状態で、再びカップルの生活が始まったんです。あ、カップルはすごく仲が良かったんです。でも、そうして入れ替わった時に、中身は大好きな相手のままなのに、見えているのが常に自分の姿になっている。それで、全然うまくいかなくなっちゃったんです。外見が変わっただけで、好きではなくなった。自分たちの愛が本物ではなかったと気付かされた２人は、元に戻った時、すぐに別れてしまいました。さらに、今こうして元に戻った自分は、そのようにして好きになれなかった人間の姿なのだと思った２人は、気が狂って…自殺しちゃったんです。
女　…
男　話、下手でしたね、すいません。分かりづらかったですね。
女　いや…重いですね…
男　ゾッとしますよね。
女　はい…
男　それに似たやつで、こんなのもあるんです。
女　はぁ
男　あるところにとても研究熱心な学者がいた。ね？　地球上のあらゆるものに興味を持ち、片っぱしから研究していった。知りうることを全て知り尽くした頃、学者は、まだ一つだけ、一切研究していなかった事があることに気が付いた。それは、自分自身のことだった。そうして自分の研究を始め、自分の全てを知り尽くした時、学者は、自ら命を絶った…。
女　どうですか。
男　…重いですね…。
女　重いですよね。いや、僕もこれはちょっと深すぎて、僕の浅い人生経験では何も解析できてないんですけど。色々と考えさせられる話だなと思って。
男　そうですね…。いずれにしても自殺しちゃうんですね…。
女　すいません、暗い話。
男　いえいえ。有名な話なんですか？
女　いえ、自分で考えた話なんですけど。
男　え？
女　（照れながら）最近、ちょっと自分というものに興味があり

女　まして。興味というか、よく考えたりして。「自分とは何ぞや」みたいな。
男　自分探し的な…ですか。
女　自分探しとは全然違うんですけど。
男　あぁ…。
女　自分探しはほら、インドとかに行けばいいわけでしょ？　できちゃうわけでしょ？　インド行ったことないですけど。
女　よくそう聞きますよね。
男　インドに何があるんですかね。
女　ね。一度は行くべきだって言いますもんね。
男　この髪が解けたら一緒に行きましょうか、インド、ひひ。
女　……
男　冗談です冗談です。

男は、台の上に立ち、
扇風機に絡まった女の髪を解き始める。

女　ありがとうございます。

男の作業のどこかが不自然。

男　すいません、手がちょっとこういうのなもんで…。

男は片手の指が曲がっている。
つまり、片手に障害があるのがうかがえる。

女　いえ、逆に本当にすいません。本当に助かりました。運が良かったです。絡まったのは運が悪かったけど。
男　誰にも気づかれなかったら、それこそ…みじめな長い時間が…。
女　ですよね。ないですけど、ずーっと誰にも見つからなかったら、変な話、餓死ですもんね。
男　そうですよね。
女　人って何日くらいで餓死するものなんですかね。
男　あぁ、どうなんでしょう。体格にもよるんでしょうか。
女　大学？
男　大学？
女　大学？
男　え、いや、体格。
女　あぁ、体格。びっくりした。なんで大学によって違うんだろうって思った。餓死に学歴関係あるのかなって。
男　そうですよね、まず痩せてから死にますもんね。最初から痩

女　せてる人は不利ですよね。
男　そうですよね。
女　でも、すごく太っている人も、やっぱり限界まで痩せてから死ぬんですかね？　蓄えている肉だけで、もつものなんですかね？
男　あぁ、どうなんでしょう…。
女　中途半端に痩せて、死ぬんですかね？
男　そうですね、栄養とか取れないから、やっぱりそういうことになるんですかね？
女　すごく太っている人が、極限まで痩せて死んだら、発見された時、誰だか分からないですよね。遺族とかもつい、「この人じゃないです」とか言っちゃいそうですよね。
男　（笑）
女　そうですよね、だって友達とかでも、ちょっと痩せただけで、一瞬、誰だか分からなかったりしますもんね。
男　そうですね。小錦とかがガリガリになったら、きっと分からないですよね。
女　あー小錦ねー…。なんかそういう時に、いかに非凡な例（たとえ）をあげるか、みたいなのがあって、僕の中で。いや、あなたの例を否定しているわけじゃないんですけど…、
男　んー、例えば、（　　）をあげるとか。
女　あー
男　あ、（　　）も平凡か。んー…（他の例を挙げようと）…、ダメだ、完全に、お相撲さん縛りにかかった。
女　モノマネでも思うんですよ。モノマネってよくやらされているじゃないですか。罰ゲームとかで。その、なんでもすぐにモノマネにいっちゃうってのも平凡でなんとかしてほしい気持ちはあるんですけど、モノマネで、一番アウトだなって思うのが、たけしをやる人ですよ。内容も皆一緒。「ダンカンこの野郎」って。あれやっちゃう人はまずいですよね。その人の、人生の工夫なさが、そこに表れていると言うか。かと言って僕も、工夫したモノマネができるかって言ったらできないんですけど、たとえ他にできるものがなくても、ダンカンこの野郎だけはやったらまずいと思うんですよ。…あ、すいません、もしかして、ダンカンこの野郎…
男　やったことないです。というか、できないと思うし。良かった。
女　ええ。

間

男　そういう実験はしてないんですかね？
女　どういうのですか？

男　すごく太っている人は、どこまで痩せて餓死に至るかみたいな。色んなひどい実験しているから、絶対誰かしてそうですよね。
女　してそうですけど、していたらイヤですね。
男　僕らがこうして興味を持った時点で、絶対誰かしていますよ。デブの餓死実験。
女　イヤですね…。

沈黙の中、しばし解く（ほどく）作業が進む。

男　で、どれくらいもつものなんですかね？
女　何ですか？
男　いや、餓死に至るまで。普通。
女　あぁ…。（冗談のつもりで）私で試しますか。
男　ありですね。
女　え…
男　しかも、手が届きそうで届かないところに食べ物を置いて。届きそうで届かないところに食べ物があったら、餓死するより先に、発狂して死ぬんですかね。

男は作業を中断し、台を少し離れた場所に置く。

男　例えば、これくらいの距離に食べ物があったら…どうなんだろ…（真剣に想像している）
女　…（徐々に怖くなってくる）
男　すいません、あまり笑えないですね。
女　はは、なんだか本気で怖くなってきたので、この話やめましょうか。
男　そうっすね、明るい話しましょ。
女　はは…

男は、そう言って、その場に佇んでいる。
妙な間。
なかなか作業をしてくれないので、

女　…髪、どんな感じですか？
男　いやぁ、相当複雑、というか、混乱、混迷、絡まりまくり、みたいなことになっていて…。すいません、僕の手さえ良かったら。
女　いえいえ、そんなこと言わないでください、ほんと。
男　いや、ほんと、僕の手さえ良かったら、これくらいイケるんですよ。
女　…

などと、作業を再開する。

男　ノドが渇いたりとかしたら、言ってくださいね。
女　はい、ありがとうございます。
男　本来なら、あなたが僕に奢るべきなんでしょうけど、状況が
女　状況だし、僕、奢りますよ。
男　すいません…。
女　ちなみに、飲むとしたら、何がいいですか？
男　…ペプシ。
女　非凡。素晴らしい答えですね。すごいな、ペプシ。マジか。
男　了解です。となると、色んなカロリーのペプシがあった場合、
女　僕はどのカロリーのペプシを買うべきなのか…。僕のセンス
男　が問われるところですね。ペプシが一種類しか置いてありま
女　せんように。というか、ペプシがない可能性も高そうだから、
男　ない場合はコーラにするのかドクターペッパーにするのか、
女　はたまた三矢サイダーに、
男　そちらの方こそ、お時間など大丈夫ですか？
女　はい、僕は大丈夫です。
男　誰か呼びます？
女　いや、なんとかなりそうなんで、もうちょい頑張ります。
男　だって、人にあまり見られたくないでしょ、この姿。
女　確かにそうですね。ありがとうございます。
男　あ、お時間とか？
女　私は全然大丈夫です。すいませんほんと。
男　いえいえ。あぁ！

と、おもむろに台から降りる。

女　ど、どうしました？
男　（肩を回しながら）肩が、
女　痛めました？
男　こりました。
女　こりました。
男　もともと肩、すごく凝るんですよ。
女　凝ったですか。
男　今、急に凝りが襲いかかってきた。なんだこれ…血流ゼロと
女　はこのことか…
男　（両手を差し出し）按摩しましょうか。
女　大丈夫です大丈夫です。
男　いえいえ、それくらいやりますよ。私も助けてもらっている
女　ばかりだと、気持ちがあれなんで。
男　いやいや、なんか、はい。

女　私、結構上手いんですよ。
男　そう言う人多いですよね。
女　はい？
男　あ、すいません、変な意味じゃないんですけど。「意外と按摩上手いんですよ」って人、すごく多いから。実は按摩って誰でも上手いんじゃないかって。誰でもそこそこできるものなんじゃないかって、思っちゃうんですよ。
女　（笑って）結構あれですよね。結構斜めからモノを見ますよね。
男　僕そうなんですよ。斜めからばっかり見ちゃうんですよ。だから手もこんなんなんですよ。
女　（強く）手のことをそういう風に言わないでください。
男　…
女　…唯一無二の手です…。事情は存じませんが・・。
男　…。
女　でも、私も斜め派ですから、大丈夫です。というか、真っ直ぐな人なんて、いないですよね。
男　たまーにいますよ。すごく真っ直ぐな人。大抵、人生を損してますけど。
女　まっすぐで損をするって、酷い世の中ですよ。
男　酷いですよね。
女　大好きですけどね。
男　酷い世の中がですか？
女　はい、大好きです。この酷さの中をいかにうまく掻い潜って、いかに、酷い事しているんだけど酷くなさそうに乗り切るかみたいなのが。
男　（笑って）超ナナメ。
女　はい。でも、基本が酷い世の中だからこそ、‘いい話’とか‘希望’とかが映えてくるわけじゃないですか。「素晴らしい世界にする」っていう目標が、人間の進化のエネルギーの一つだったりするじゃないですか。ずーと素晴らしい世界だったら、きっと、なんだかすごく平坦だし、そのありがたみに気づくこともないし。「気づかない」。それは、時には幸せなことかもしれないし、時にはとても淋しいことかもしれない。
女　…すごく考えていますね、色々。いちいち、深いというか、結構真面目なんですね。
男　ええ、真面目なんですよねぇ・・。
女　でも、真面目な方でなかったら、こうして助けてくださったりしないですし。
男　あぁ…。ちなみに、「いちいち」の使い方間違っていますよ。
女　え、あ、すいません
男　「いちいち」は否定で使うものでしょ。

女　そうでした…。
男　失礼ですけど、お仕事って、何をされているんですか？
女　ね。
男　ね？
女　僕も、あなたに、お仕事を聞こうとしてたんですけど、こうして、お互いの実態を知らないまま助け合っているのもいいなって思って
男　私が一方的に助けていただいているだけですけど、はい。
女　お話しながら相手の事を色々と想像するのも楽しいし、職業聞いちゃうと、先入観というか、たとえば、水商売の方だと知った場合、あぁ水商売やってる人なんだ～とか、聞き上手なのは水商売をやってるからか～とか、余計な偏見を持ってしまうというか、肩書きって、純粋に相手の事を見れなくする。そういうのもあって、できれば最初は、フラットな状態で接したいと思って。それで、聞くのをやめたんです。
男　（感心して）すごい考えてる…。すいません。じゃあ、まだ言わない方がいいですね。
女　言わない方がいいんですけど。僕、モノ書きやっています。
男　言っちゃった
女　言っちゃいました。
男　割とサクッと言いましたね。
女　サクッと言いました。
男　その，言わない‘っていうの、素敵だなぁと思ったのに。
女　はい、もう、サクッと言おうと思って。
男　いや、気持ちよかったです。
女　ありがとうございます。モノ書きやってる（くしゃみ）＊＊と言います。
男　（くしゃみで名前が聞こえなかった）
女　髪解き、頑張らせていただきます。
男　（くしゃみ）

男のくしゃみがうつったのか、女も大きなくしゃみを数回する。
女が手にずっと持っていたヘアクリップが、唾液で汚れた。
ヘアクリップの処置に困る女。
男が受け取ろうかと歩み寄るが、女は恥じる。
女のそばに、なぜだか、トイレットペーパーがぶら下がっていた。
女は、トイレットペーパーにヘアクリップを噛ませる。
重みで、カラカラと回り、紙が地面まで伸びる。
出てきたペーパーに文字が見える。
［鳥ト踊る］

ピアノの音。
女は、そのペーパーを千切り、鼻をかむ。

［ 2 ］

少しの時間経過。
女のそばに、大人用オムツが置いてある。
男が購入してきたようだ。
女は、不安気にオムツを見ている。

男　（何でもないことのように）トイレにも行きたくなるだろうなと思って。
女　…ありがとうございます…
男　いえ

男はまた台に立ち、髪を解く作業に取り掛かる。
女は、オムツを見つつ、

女　思ったんですけど
男　はい
女　羽根は取れないんでしょうか…？
男　はい？
女　羽根は取れないんでしょうか…？　扇風機の。
男　あーこれ…、羽根って言うんだ…。我が家では、ビラビラって言ってました。
女　びらびら
男　羽根っていうんですね
女　…うちのとかは、その、ビラビラが、真ん中でカポッと取れるようになっているんですけど。
男　（少し見て）取れないですね…。
女　そうですか…。え、でも、イマドキ取れないのってあります？
男　んー…でもこれは取れないですね…
女　…強引にとかでも無理そうですか？
男　（少しやってみて）いやぁ…残念ながらって感じですね。
女　……本当ですか？
男　本当ですよ？　え、どういう意味ですか？
女　…。
男　…。
女　あの、もし、本当に無理そうでしたら、髪、髪を切りますんで。
男　え、いや、だって、一回も切ったことないんですよね？　生まれてこのかた。

女　はい、生まれてこのかた。
男　それはなんとか回避しましょうよ。
女　でも、事態が事態ですから。
男　いやいや、そんな大事な髪。扇風機ごときで切ることはないですよ。
女　女の人にとっての髪って、ええ、なんとなくわかりますし。こんな、なんでもアリな時代でも、女の人がばっさり髪を切ったら、それなりの話題になっちゃいますでしょ？　タトゥー入れてきたより意味が出ますでしょ？
男　街の噂になりますね。
女　でしょ？
男　でも、本当に無理でしたら、諦めますので。街の噂になりますので。
女　はい、でも、限界ギリギリまで、なんとか切らないで済む方向でいきましょう。
男　…はい、でもこれ以上ご迷惑おかけするのもあれですし、いいですよ、もう、誰か呼んでいただいても。街の噂になる程ご近所付き合いもないし。
女　…もうちょい頑張りますよ。頑張らせてください、男として。

少しの間

男　……携帯取ってもらってもいいですか？
女　はい？
男　携帯を取ってもらってもいいですか？
女　え、なにするんですか？
男　いえ、別に、すいません、携帯電話を。鞄に。
女　・・・
男　お願いします。
女　（鞄の）横のポッケに。
男　…よかですよ。よかよか。うん、電波入るかなあ…。

と、取りに行く。
女の鞄は、そばに置いてある。
男、女の鞄から携帯電話を取り出し、渡す。
女、電話をかける。

女　（押す番号を見て）え、110、（と焦る）
男　もしもし。ミナミ区ミナミ通り1丁目の方で、誰かのピアノが相当うるさいので、注意してもらっていいですか？
女　はい、すいません、お願いします。

女、電話を切る。

[1]の最後から鳴っていたピアノがずっと流れていた。

男　…

男は、やんわりと女から携帯を取り、また鞄に戻す。
しばしの間。
やがてピアノが止まる。

女　…誰かが弾いてたんですね。
男　弾いてたんですね。

男、煙草をくわえる。火はつけない。

男　例えば、僕が、あなたの恋人だったらどうします？
女　どういう意味ですか・・？
男　いや、例えば、あなたの恋人が、外見が僕になっちゃったんです。中身はそのままで。
女　…え？
男　さっきの、男女の中身が入れ替わるって話で、ちょっと浮かんだんですけど…。あのー、とある会社があってですね？その会社は、恋人の愛を確かめてくれる会社なんです。で、あなたの恋人が、あなたとの愛を確かめたくなって、その会社に依頼するんです。
そしたら、その会社は、極端な思考の会社だから、大胆な手法を取るんです。外見を変えてしまえと。外見も名前も変えて、その上で再び彼女に会えと。そこで再び愛が芽生えたら、本物の愛だと。
女　小説ですか？
男　小説というか、例えばこんな話はどうだろうって、思っただけなんですけど。
女　はい…。え、でも、私が、元々その彼氏の外見が好きだった場合、話は、すぐ終わっちゃいません？
男　？
女　ですから、外見が好きなわけだから、その外見が変わった時点で、好きじゃなくなりますよね。
男　……。そこは、確認済みなんです。
女　確認済み。
男　はい。あなたは、常日頃から、「男は外見じゃない、中身だ」と言っているんです。「あなたを別にかっこいいと思ったことはない。ただ、その人間性が何よりも好きだ」と。
女　人間性。
男　はい。その場合、この実験は成功しますかね？

女　…どういう実験でしたっけ？？
男　外見が変わっても、ちゃんと愛は芽生えるかという。
女　…どうなんでしょう…？
男　どうですか？　想像してみたところ。
女　…想像するにも…。
男　あ、違うわ。成功しない方がいいんだ。成功するつもりでやったけど、やはりうまくいかなくて、男も焦って、彼女に告白するんです。これは実験なのだと。「俺だよ俺」って。「俺だよ俺、分からないか」って。でも、彼女はそんなの、信じてくれるはずもない。姿が変わるなんてありえないわけですからね。で、男は急いで元の姿に戻してもらおうとするんですけど、もう戻れないんですよ。「愛を確かめたいと言ったのはあなたでしょ」って。
女　今のは会社の言葉ですか？
男　はい、会社が言うんです。「愛を確かめたいと言ったのはあなたでしょ。もう答えは出たはずだよ。姿が戻ったところで、元の関係には戻れないよ」って。
女　はい。
男　はい。
女　で、男の人の姿は戻るんですか？
男　いや、それは本当に戻らないんです。その姿を変えるクスリは一方通行なんです。
女　クスリだったんですね。
男　クスリですね。しかも錠剤ですね。粉末でも液体でもなく、こういう（手で示す）丸い錠剤。Ｂって書いてあります。
女　…バファリン
男　……，化け薬‘のＢです。その化け薬は一方通行。元に戻ることはできないんです。男は、完全にうまくいくつもりでいたから、説明書をよく読んでいなかったんです。
女　説明書ですか。
男　説明書ですね。あ、普通に口頭の説明でもいいですけど、いや、うん、説明書の方がいいですね。なんかそういう、紙きれの書類になっちゃっている安直さとか。それを見落とす間抜けさとか。
女　はぁ…
男　……。嘘っぽいか。
女　はい？
男　嘘っぽいっすね。姿を変えるクスリとか、そんなもんねーよって話ですもんね。ふしぎなメルモじゃあるまいし。っていつの時代だよって。
女　まあ、整形ならわからなくもないですけど。
男　整形はありきたりすぎるでしょ。もっとユニークな発想が欲しい。

女　……煙草、どうぞ吸ってください。
男　あ、大丈夫です。ここ、煙がこもりそうだから。吸いたくなったら外行きます。
女　どうぞ、吸ってきてください。
男　大丈夫です。
女　（女を少し見つめ）…うん、この今の状況は面白いな。面白いと言ったら失礼ですけど。
男　私のこれですか？
女　はい、あ、これはいいわ。
男　「ひょんなことから、身動きの取れない状況に陥った女。ひょんなことから、身動きの取れない女と出会った男。見知らぬ男と女が……」なんちゃらみたいな。
女　あー
男　いや、実は今、ちょうど、男と女、二人の話を考えていて。
女　そうなんですか。
男　色々と構想を練っているんですけど、どうもありきたりになっちゃって。
女　そういうお話書く人って、本当すごいと思います。
男　ん？
女　だって、私たちが普通に見ている映画とか、ドラマとかって、全部誰かがゼロから創りだしているってことですよね？
男　まあ、そうですね。でもゼロからのオリジナルってなかなかないですけどね。何がしか、影響受けてたり、オマージュだったり、パクってたり、パクってたり、パクってたり。それは良く分からないですけど、うん、はい、本当すごいと思います。
女　演劇は見ないですか。
男　演劇ですか。
女　はい、舞台。劇場。演劇。
男　あぁ、あまり見ないですね…。
女　あぁ、そうですか。僕は割と、演劇の方をやっていたりするんですよ。
男　あ、すいません、
女　いやいや、まぁ、普通見ないですよね。
男　演劇を主にやってられるんですか？
女　主にというか、のみですね。演劇以外やったことないんです。
男　あぁ。私、演劇って、ミュージカルしか見たことないんですけど、どういったものをされているんですか？
女　・・・、あ！ウサギだ！　あ！ハハ！ウサギだ！
男　みたいな。
女　…それは、本当にウサギがいるんですか？
男　いないですいないです。全て無いものを有るものとしてやっているんです。舞台上には何もないんです。無対象。お客さ

女　んがそれぞれで想像して楽しむ演劇。，無対象演劇‘を提唱
男　しているんです。
女　へぇーすごそうですね。面白そう。
女　適当にそんな事言っちゃダメですよ。どこが面白いんですか
女　…。だーれも想像なんてしてくれませんよ…。想像して楽し
女　む演劇とはどういうものかを想像することすらもしない。人
女　間が失いつつある能力の一つ、想像力。
女　（独り言のように）今度本物のウサギ使うか…。「想像しな
女　いでいい演劇」。全部提供して、一切想像しないでいいよう
女　にするんだ。そうするしかないか…
女　……。

しばしの間。

女　自分の事で申し訳ないんですけど、髪、どんなでしょうか？
男　あ、すいません、やりましょう。
女　助けとか、本当、呼びませんか？
女　いえ、せっかく助けていただいているのに、なんですけど…
女　…、
男　…ん？
女　……ト、ト、ト、、お手洗い…。
女　…出番ですか。
男　え
女　あれ（大人用オムツ）。出番ですか。穿かれますか。
男　いや…でも、かがめないですし。
女　…ちゃんと、隠しますんで。僕、穿かせますよ。
男　いや、それは
女　いやいや、僕、
男　いやいや
女　いや、本当、
男　いや
女　いや、
男　いやいや
女　いやいやいやいや、本当僕、変な趣味ないですから。見たり
男　もしません。（曲がっている手を差し出して）変なのは手だ
女　けです。あなたこそ偏見ですよ。
男　私は別に
女　本当、何もしませんから。何かする奴だったらとっくに何か
男　してますよ。でしょ？
女　……もう、髪、切っちゃいません？
男　勿体ないですって…！　あとで絶対後悔しますよ。小便ごと
女　きで、生来一度も切ったことのない髪を切ったなんて。…あ
男　れ、…小の方…？

女　はい…

男　じゃあ、絶対後悔しますって！　大丈夫です。ほら、こうして、隠して、

と、女の腰の前で自分の上着を広げる。

女　で、パンツ、下着、パンティ？パンツ、下着、を自分で下ろ

男　せる所まで下ろしてもらって。僕見ませんから。目、つぶっていますから。息も止めていますから。で、穿かせますから。

女　……。

男は態勢を取り、目をつぶり、じっとしている。
しばしの間。
やがて、女は渋々、ゆっくりと、下着を下ろせるところまで下ろす。髪が引っ張られているので屈めない。
男は、残りの作業を引き継ぎ、慎重に慎重に、パンツを脱がせ、
女は慌てて自分のパンツを取り上げ、
男はまた、慎重に慎重に、オムツを穿かせていく。
男は完全に緊張し、必死に誠実に作業をしている。
女は、何事もなく穿けると、少しの安堵を見せる。
男も、緊張から解き放たれ、バタバタと大いに喜んでいる。
女は、ふと、男の手に目が止まる。
男の、悪かったはずの片手が、正常に動いている。
男は、女の視線を感じ、じっと止まっている。

ピアノの演奏。

男、手の嘘がバレた苦悶の舞。
女、恐怖に陥る舞。オシメにお小水を出す舞。

［　3　］

ピアノの演奏、アウト。
男、女の髪を解いている。
女は先程までとは違い、厳しい表情をしている。
男は自分の世界に入り、構築中の物語を語る。

男　髪が絡まり、身動きの取れない女。
身動きの取れない女の髪を解（ほど）く男。
その髪は、幾重にも複雑に絡まり、
一日や二日では、到底解けるものではなかった。
男は、毎日数時間、女のもとへと通い、髪を少しずつ解いていった。
今日も少し解き、明日も少し解きにやってくる。
髪を、解き、解かれるだけの間柄の男と女・・・。
たったこれだけのシンプルな話でも素敵ですよね。大人な感じで。

女　（応えない）
男　下着に戻しますか？
女　いいです。
男　変な感じしません？
女　大丈夫です。肌触りが相当良くてびっくりしています。
男　そっすか。匂いの方は？
女　ないです。オシメに人生を懸けている人が作っているんですから、それはそれは素晴らしい品質ですよ。
男　マジっすか。それは良かったです。
女　それより、高い椅子か何かもらえませんか。疲れてきました。
男　…ないんですもん。
女　買ってきてもらえませんか。
男　買うお金ないんで。
女　私ありますから。
男　わかりました。買ってきます。つって、全然低い椅子だったら笑えますね。
女　…
男　やってみよ。

男、自分が立っていた台を持って去り、
すぐにそれを持って駆けて来る。

男　買ってきましたー。（置く）
女　（屈めないので座れない）って、低いよ！
男　（爆笑）

女は、男が爆笑している隙に、台に駆けのぼり、扇風機に手を伸ばす。

女　（作業が）ぜ、全然進んでいないじゃない！！

髪は、一向に解かれていない。
女は、激しく髪の毛を引っ張る。
しかし、引っ張った程度ではビクともしない。
下から男が見ている。

女　……

女は、諦め、台から降りる。
緊迫した間。

女　…なんなんですか？

男　……。

女　助けを呼んでもらえますか？
何も告げ口とかしませんから。普通に、髪の毛を一緒に解いてくれる人、呼んでもらえませんか。

男　俺が解きたいんです。

女　は？

男　俺が解いて、感謝されたいんです。

女　誰かを呼んでも、ちゃんと感謝しますから。

男　いや、もうしないでしょ、俺には。

女　するよ。しますよ。発見してくれたってだけでしますよ。感謝していますから。

男　でも…皆に感謝するよね？

女　はい？

男　誰かを呼んだら、助けてくれた皆に感謝をしますよね。

女　何を言っているんですか？

男　俺、感謝を一人でされたいんです。感謝を一身に受けたい。感謝の一人占め、みたいな。人間て欲深いんだな…。

女　欲深いんだなって…あんたでしょ？　何を考えているんですか？

男　わかんないす。自分でも、よく、わかんないす。

女　わかんないのはこっちよ。なんなのよこれ。髪が扇風機に絡まるわ、親切な人に見つけてもらえたと思ったらこれだわ。

男　俺はもう、親切な人ではないですか。あなたの中では。

女　…このあと次第です。このまま助けてくれたら、親切な人だし、命の恩人だし、一生感謝しますよ。

間。
ピアノがまた聞こえて来る。

男　…（ピアノが聞こえて来る方を指して）電話しますか。
女　はい、貸してください。
男　俺がしますよ。
女　警察には電話しません。林先輩にするんです。
男　林先輩？
女　はい、林先輩。一日に何回か頼みごとをしてあげないといけない先輩がいるんです。人から何かを頼まれないと不安になるって。頼りにされてないと、自分の存在意義を見失って怖くなるって。
男　だから一日に何回か、どんな小さな頼みごとでもしてあげないといけないんです。そういう先輩。林先輩。ヤンキーなんだけど。
女　ヤンキー？　え、元ヤンですか？
男　私は違うわよ。ただ気に入られてただけ。最初は、別の意味で気に入られて、毎日のようにボコられ、いつからか正常に気に入られて、何から何まで面倒をみてもらった。そういう先輩。林先輩。早く電話貸してください。
女　…
男　（男が警戒していることを悟り）そんなベタなことしないわよ。
女　じゃあ、俺がかけて、耳にあてますよ。腕、後ろに組んでてください。（と、携帯をいじる）
男　…君は小さい男だ…
女　（携帯のアドレスを探しながら）林…、なにで入ってるんですか。
男　林、先輩。
女　…。

男、‘林先輩’を見つけて電話をかける。
女の耳に当てる。
ピアノが止む。
男は、チラとそれを見る。

女　（ガラッと声が変わり）あ、先輩どうもです。今、平気ですか？　あ、あのー、ちょっと気になっちゃって、もしかして先輩だったら分かるかなって思って電話しちゃったんですけど、あのー…、今日の天気ってどういうことになってましたっけ？　…、あ、ずっと快晴ですか。さすが知ってますね〜。助かりました。少し遠くに雲が見えたもんですから、洗濯物が心配になっちゃって。あ、ですよね、失礼しました。

どうもありがとうございました。失礼します。ちゅす。

男は、電話を切る。
ピアノが再び鳴り始める。
ピアノが鳴る方を見る男。

女　すいません、もう一回かけてもらっていいですか？
男　（ピアノの鳴る方を指して）警察？
女　林先輩。「もう一つ聞き忘れてました」ってのが先輩は嬉しいんです。
男　大丈夫ですか、その人。いや、すいません。

男、再び電話をかけて女の耳にあてる。
ピアノが止む。
男、ピアノの方を見る。

女　（ガラッと変わり）あ、先輩、すいません、一つ聞き忘れてまして…。あ、はい、ドジですすいませんっ。あのですね、あのー…、明日の天気って、どうなってますっけ？
男　快晴ですか。ほんと知ってますねー持ってますねー。どうもありがとうございます。いえ、明日ちょっと外回りがあるもんで、はい、すごく助かりました。どうもありがとうございます。失礼します。ちゅす。
女　（電話を切って）林先輩、天気詳しいんですか。

ピアノが再び鳴り始める。

男　（ピアノが鳴る方を見て）……

男、ピアノの音と電話の関係が気になる。

男　あの、
女　はい。
男　林先輩って、ここら辺だったりするんですか？　お住まい。
女　なんで？
男　いやなんとなく。
女　ここら辺だね。
男　あのー…、もう一回林先輩にかけてみてもいいですか？
女　は？　なんで？　何聞くの？
男　いえ、あの、ちょっと間違えてかけちゃいました的に。
女　かけ間違えが一番最悪だよ。自分じゃなくて誰にかけようとしてたんだって話じゃん。
男　あ、でしたら、なんでもいいんで。

女　……、じゃあかけてよ。
男　はい。

男、電話をかける。
ピアノが止む。
男、電話を切って、

男　ピアノ弾いてるの、林先輩ですか？
女　ちょっとワン切りした？
男　え、あ…
女　ちょっと何やってんの？　ありえないよ？

電話が鳴る。

女　ほらぁ、キレてるよっ、早く出てよっ。

男、急いで出て、女に電話をあてる。

女　先輩助けてくださいっ。

男、慌てて電話を切る。
咄嗟に女を殴ろうと手を振り上げて迫り寄る。
女、断末魔のような凄まじい悲鳴。
電話が鳴る。

男　わあ！
女　早く出ないと、先輩どう動くかわかんないよ！
男　変な事言ったら、、（電話に出る。女にあてる）
女　（ガラッと変わり）あ、先輩、すいません、電波が悪くて。
え？　いや、助けてくださいじゃなくて、助かりましたって。
さっき本当助かったんで、助かりましたって、もう一度言いたかったんです。はい。え？　本当そうですよお～、先輩ナシじゃ生きていけませんよお～。すいませんでした、何度も。助かりました。どうもありがとうございました。はい、失礼します。ちゅす。

男、電話を切る。
またピアノが鳴り始める。
曲のクライマックスが流れ、ピアノの演奏が終わる。

男　…ピアノ弾いてるの、林先輩な気がするんですけど…。
女　林先輩ピアノなんて弾かないよ？　絶対的に。ガラ的に。
男　あ、そうですか。

女　弾くわけないじゃない。
男　はい。
女　なんだと思ってんの、林先輩を。
男　すいません、失礼しました…。

間。

女　さっきはごめんなさい。
男　…何がでしょう？
女　叩かれた時、
男　あ…
女　断末魔みたいな声出して。
男　あ、いや
女　びっくりしたでしょ、声に。断末魔みたいな。
男　いえ…こちらこそ叩いてしまって…
女　あんな声出して、この女なんだと思った？
男　いえ、そんな
女　林先輩をなんだと思ってんの？
男　林先輩？
女　…林先輩は、それこそ、この酷い世の中で真っ直ぐに生きる、希少な生き物なんだよ。
男　……。
女　（しみじみと）希少な、美しい、飛べない鳥なんだよ…。
男　……。まだお会いしてないんで、あそっすかとしか。
女　は？
男　だってそうじゃないですか。さっきまでは、所謂ヤンキーをイメージしていたから、急にそう、飛べない鳥とか言われてもピンと来ないですよ。いや、勿論、お会いすれば、すぐに共感できるとは思うんですけど。
女　林先輩に会ったら、あんたなんかね……、死ぬよ？
男　……。もっと工夫した言い方はないですか。死ぬとかじゃなくて。
女　馬鹿にしてんの！？
男　とんでもないですっ。ただ、どうしても気になっちゃうんです、そういうの。もっといい言葉はないかって。ちょっとした病気なんです。
女　病気だよほんと。
男　病気じゃないですよ。
女　病気だよ。
男　よくないよくない。いや、病気って言いだしたのは僕ですけど、なんでもすぐに病気にしちゃうのは良くないです。やめましょう。そんなこと言いだしたら人類皆病気ですよ。あ、いい言葉、（メモを取る）人類皆病気。

女　…ほんと病気だよ…
男　(メモを書き終え)林先輩ってのは、そんなに怖いんですか。
女　警察より怖い。そう思ってもらえれば。
男　え、よくわかんない、
女　だから私きっと言うよね、林先輩に。あなたのこと。あんなこと、こんなこと。
男　…林先輩は、どのような、服装とか、でらっしゃるんですか？
女　…色々だよね。5、6年会ってないから、今はどんな感じか、わからないけど、
男　そんなに会ってないんですか
女　会ってないよ、ずっと電話だけ。けどきっと変わってないよ、あの人は。色々だよ。色々なジャージだよ。
男　やっぱりジャージなんですか。
女　(強く)ジャージ以外に何を着ればいいわけ？　教えてあげてよ、林先輩に。
男　いや、ジャージでいいと思います、全然、はい。
女　この流れで、こういうこと言ったら、林先輩怖さにみたく聞こえそうでイヤなんですけど、
男　ん？
女　さっきは、叩いてしまってごめんなさい。女の人、初めて叩きました。突き飛ばしたことは二回ほどあるんですけど、小学校の頃。叩いたのは初めてでした。
男　でも叩く手前だったので。
女　叩いたも同然です、あんなもの。触れたか触れてないかじゃない、暴力であることには違いない。
男　今日は、人生初めての事が目白押しで、ちょっと混乱してます。ごめんなさい。
女　…私だってこんなの、人生初ばかりですよ…
男　ですから、人生初だからこそ、勿体ないと思うんですよ。すぐに終わらせるの。
女　ん？
男　勿体ないと思いませんか。すぐに終わらせちゃったら。
女　何を言ってるんですか？
男　よく考えてください。だってね、こんな平坦な毎日の中でですね、このような事件、出来事、絶対に遭遇できないじゃないですか。密室で、扇風機に髪の毛を絡みとられ、密室ってなんだ。まいいや、知らない男女が遭遇する。すごいじゃないですか。すごいですよね？
女　まぁ、普通ないでしょうね。だからなんですか？
男　ですから、すぐに終わらせちゃったら勿体ないと言っているんです。
女　それはお仕事柄の目線でしょ？
男　違いますよ、人生の出来事としてですよ。

女　こんな出来事いらないです。私は早く解放されたいです。
男　なんで？　全然わかんない。
女　なにがよ。

二人は徐々に感情的になってくる。

男　だってね、え？なんで？　よく考えてくださいよ。髪が絡まりました。ね？　知らない男がやってきました。すぐに助けてくれました。はいさようなら。
女　味気ないと思いませんか？
男　そんなことないです。もう十分色々あったんで、もう十分です。
女　なんで？
男　なんでじゃないよ。じゃあ、逆に聞きますけど、そこからどんな展開があったら勿体なくなくなるんですか？
女　どんな展開でもいいんですよ。ただ、すぐ終わっちゃうのは寂しいって言ってるんです。
男　でも、もう、結構色々あったじゃないですか。ダメなんですか、これじゃあ？　まだ物足りないんですか？　あなたはこれを利用して、お話を書きたいだけでしょ？
女　そんなんじゃないですって。そう言いつつごめんなさい。本当そういうのじゃないんですけど、ごめんなさい。
男　（メモ帳を取り出し）…やっぱり、こういうちょっとしたイザコザはあった方がいいのかな…。そうだよな、ずっと大人な美しい感じで、淡々と進めても限界があるよな…。

男、メモを取っている。

女　最低ですね。そうやって、お話ができるまで私をこうしておくつもりですか？
男　（聞こえていない。自分の世界に入り、語る。）
そうした日々を送っているうちに、
男と女の間には、同じ想いが芽生え始めていた。
この髪を解く作業がある限り、２人は一日数時間会うことができる…。
逆を言うと、この作業が終わってしまったら、会うことができなくなってしまう…。
時間をかけたいその思いとは裏腹に、女の人の体が衰弱してくる…。
女の人の体を思い、断腸の思いで、断腸の思いで？まいいや、…作業を急ぐ男…。
しかしその時、男は…、女に…、他の男性の影を見つける…！
ここでイザコザ勃発、なのかな？やっぱり。（さらにメモを

女　書き進める）
　…人をこんな目に遭わせてまでお話を書いて楽しいですか？
男　こんな目に遭ったのは自分でしょ？
女　助けずに、ネタにして書いているじゃない。
男　だから助けているでしょ？　何言っているの？　助けているじゃん。
女　こんなの助けているって言わないよ。
男　ふざけんなよ、俺がいなかったら、小便だって垂れ流しだよ？
　孤独だよ？　最悪それこそ餓死だよ？
女　欲張りだよ。あんたそれすんごい欲張りだよ。
男　欲張りなのはそっちでしょ？　人の事故を利用してお話考えてさ。
　確かに俺も欲張りだけど、いや認めますよ、欲張ってますよ猛烈に、でも、あなたも欲張りですよ。最悪の事態で、最も必要なのは何？　救世主でしょ？　それはもう現れているんだよ？　これ以上何を求めているの？　最悪強姦されたっておかしくない状況だよ？　そんな態勢、男から言わせれば強姦してくださいって言っているようなもんだよ？

女、泣いてしまう。

男　…ごめん、怖いこと言って。でも、それが真実だ。性欲にまつわる罪がこの世からなくなることはない。心の底から許せないんだ。信じられないんだ。でもなくなることはないんだ。戦場だろうが、整備された先進社会だろうが変わらずにね。恐ろしいよ本当に、人間は…。
女　（泣いている）
男　…俺、そんな悪いことした？　よく考えてよ。基本、助ける方向で進めているじゃない。それを、ちょっと寄り道しているだけじゃない。目の前に助かる道があるのに、すぐに助からないからそういう気持ちになっているだけでしょ？　よく考えてみてよ。俺が現れただけでも幸いなんだって。欲張りなんだよ。お互いさまだけど。
　さっき言った、人間って欲深いんだなって、こういうことを言っているんだよ。

男、座りこむ。

男　欲張りついでに言うけど、書きたいんですよ、最高の台本を…珠玉の言葉で。
　今、すごく湧いてきそうな気がしているんですよ。

女　俺が現れただけでも幸いと思ってさ、少しは付き合ってくれたっていいじゃないですか。書けたらちゃんと助けるから。
男　（泣きながら）ということは、やっぱり書けるまで助けてもらえないってことですか？
女　そういうわけじゃないですけど（泣きだす）
女　…は？　…泣いた…？

泣いている男。
女は、男の泣く姿に気持ちも冷めてしまい、泣きもおさまってしまう。
男を眺めている。

女　……書けばいいじゃん、，珠玉の言葉，。
男　……（泣きがおさまってくる）、珠玉の言葉って言葉なんだよ。その時点で珠玉じゃねーよ。
女　自分に言ってるの？
男　自分に言ってるんすよ。俺の口から、とんでもなく陳腐な単語が飛び出してくるんですよ。愕然とするんですよ。モノ書きのくせにって。
女　珠玉の言葉に代わるいいフレーズって何かないすか。
男　（首を傾げる）
女　わかんないすか。俺も全然浮かんで来ないす。もしモノ書きのテストがあって、「珠玉の言葉」をイキな言葉に言い換えてくださいって問題が出たら、完全にアウトですよ。
男　何か他に、問題出してみてください。
女　問題ですか
男　はい、なんでもいいので適当に。
女　えー…
男　なんでもいいので。
女　…「見知らぬ男」を言い換えたら。
男　……。ほらわかんないですもん。全く何も浮かばないですもん。一瞬「まだ見ぬ男」って浮かんだけど、全然意味違いますもん。
女　作家さんのテストがあるんですか。
男　ないですよ、そんなもの。そんなものあったら真っ先に落ちますよ。モノ書きは完全なる自由の国ですよ。みんな好き勝手書いて、好き勝手売れていくんですよ。
女　みーんな書けばいいのに。日本全国みーんな書けばいいのに。そしたら俺の居場所なんて本当なくなりますよ～（また泣く）。

泣く男。
どうにもしようがない女。

男　（泣きながら）…答えたくなかったらいいんですけど…、恋人っているんですか？
女　はい…
男　そっすか。俺いないっす。
女　そうですか
男　じゃあ、さぞや恋人さん、心配しているでしょうね。
女　かもしれませんね。
男　ごめんなさいね、恋人さん。
女　…はい
男　写真とかないんですか。
女　……、ありますよ。
男　マジすか、見てもいいですか。
女　どうぞ。手帳に挟んでます。
男　手帳に？
女　手帳に。
男　（見つけて）これ？
女　はい。
男　失礼します。

男、女の鞄の中から手帳を取り出し、折りたたまれた紙を一枚取りだす。

男　これ？
女　はい。
男　大きいですね…
女　拡大したんです。

男、折りたたまれた写真を広げて、止まる。

男　…何の写真ですか？
女　（少し照れながら）何のって、彼との写真です。
男　…右が？
女　彼です。
男　…で、左が？
女　私でしょ。
男　これ？（見せる）
女　はい。絵描きさんに絵にしてもらう予定で、それで大きめの紙に、

男は、困惑した様子で写真を壁に貼る。

女　ちょっと（照れている）

写真には、全く見知らぬ男女が写っている。
男は困惑している。
それもそのはず。目の前の女と写真の女は、全くの別人である。

女　何か変ですか？　え、もしかして知り合いですか？
男　彼氏さんと？
女　はい。
男　…いえ、全然、はい、とてもいい感じの方で…
女　…ちょっとすいません。

男、自分の携帯カメラで女を撮る。

女　な、何ですか？
男　（言い訳）間違えました。すいません、間違えました。
女　？
男　…これ、見てもらってもいいですか？

と、女に、今撮った写メを見せる。

女　ん？

男、すぐに携帯を引っ込める。

女　（よく見えなくて）誰ですか？　今の誰ですか？
男　誰ですか？
女　知りません、誰ですか？
男　ご自分ではないですか？
女　違います、誰ですか？
男　これ（写メ）とこれ（写真の女）は、同じですか？
女　私はこれ（写真の女）です。
男　写真写りいいですね。
女　ありがとうございます。今の写メの人誰ですか？
男　ぼ、僕の友達です。
女　その人も扇風機に髪の毛が絡まってました？
男　そ、そうなんです。あのー、以前、友達、が、こんな目に遭った～って送ってきてくれて。類は友を呼ぶって言うから、もしかして知り合いかなと思って。
女　知り合いじゃないですね…多分。もう一回見せてもらっていいですか？
男　…（写メを見せる）
女　（写メを見ながら）…やっぱり知らないですね…。本当私と

男　同じ状況ですね…。でもこの人助かったんですよね…？良かったぁ…
女　あなたですよ。
　　アナタデスヨ？　ん？

男、混乱して頭を抱える。
女と写真の女は、明らかに別人なのに、女はそれを自分だと思っている…。そして写メに写った自分自身を別人だと思っている…。

男　……この人、誰かと入れ替わったってこと……？
女　どうしました？　大丈夫ですか？
男　…こんなこと言ったら、変に思われるかもしれないですけど…、ここって、何処なんですか…？
女　僕、考え事をしてて、気が付いたらここに来ていて…。
男　さっきも、表に出たりはしたけど、ここが、どの町の何処なのか、よく分かってなくて…
女　…私もよく分かってないんです…
男　え？　でもさっき、ミナミ通り１丁目とか
女　それは、それだけは把握してたんですけど…
男　この部屋が何なのかとかは…
　　吸い寄せられるようにここへ…
　　吸い寄せられるように…。
　　俺もだ…吸い寄せられるようにここへ…。
　　何だ…？　やべえ…、やべえ匂いがする…。

男は何かを求めて、部屋の中をうろうろする。
女、おもむろに男に手を突き出す。

男　…ん？
女　（手を開いた状態で）基準。
男　…ん？
女　これが基準（指が５本）。（指の本数を変えながら）これが５（指３本）、これが３（指２本）、これが２（指４本）、これが４（指１本）。じゃあこれは（指５本）？
男　…な、なんですか…？

男、混乱している。
女は再び

女　（指を１本立て）これ基準。
男　…ん。
女　これが１（指５本）、これが５（指４本）、これが４（指

男　３本）、これは（指２本）？
女　…２じゃないの？
男　ブー。
女　え？？
男　これは？

女は手で狐を作る。

女　狐！犬！狐！
男　正解。
女　どっち？
男　狐。
女　よしっ
男　（再び指２本）基準。これが２（指３本）、これが３（指４本）、これが４（指５本）、これが５（指１本）、これは（指２本）？
女　わからないよ…分からないよお…！
男　基準があって、基準じゃないものがある。
女　基準を基準に、基準じゃないものは位置づけられていく。
男　何…？
女　昨日と明日があるのは、今という基準があるから。
男　他人がいるのは、自分という基準があるから。
女　好都合と不都合は、私を基準にある。
男　何言ってんだよ…何言ってんだよおおお（完全に混乱）。
女　何だよ…何が起きてんだよ…わけわかんないよ…

男、パニックを起こし、歩きまわっている。

女　女は、妄想癖の者には、この世の不思議が一番効くと、満を持して一気にたたみかけた。男はまんまとパニックに陥り、その間に逃げようという目論みだったのであるが…

女、必死の形相で、絡まった髪の毛を力任せに引っ張る。
男、女の鞄の中身をぶちまけ、その中から女の免許証らしき物を見つける。
免許証と女を何度か照らし合わせ、奥に去る。
ナイフを持って戻ってくる。
女、止まる。
男は、静かな状態である。

男　何？　どういうつもり？　あんた誰？
女　…

男　あんたこれだよね？（免許証）

免許証に写っている人は、女その人だった。

女　はい…。
女　これだよね。（先ほど見せていた写メを見せる）
男　はい…。
女　そううまくいくはずもなく、ただただ、事態をさらに悪化させた。
男　え、じゃあ、あの写真のカップルは？
女　友達。
男　なんでそんな写真を持ち歩いてるの？拡大コピーまでして。
女　結婚のお祝いに絵にしてプレゼントしようと思って。絵描きさんに見せるために。
男　じゃあ何？　俺を騙したってこと？
女　あんただって騙したでしょ！？　手が悪いとか色々…！
男　あれは何？　基準がどうたらこうたら。何、あの呪文みたいなの。すげえ目が回ったんだけど。
女　あれは、普通のクイズ…。
男　quiz？
女　はい。
男　どんな？
女　タネを知ったらきっとふざけんなって感じになると思うので。
男　ならないから。怒らないから。言って。
女　いや。
男　怒るよ。
女　…一つ前に出した指の数を言っているだけ。
男　（ゆっくりと丁寧にやって見せる）
女　基準（指５本）。これが５（指３本）、これが３（指４本）、これが４（指１本）、これが１（指３本）、じゃあこれは（指２本）？　…一つ前に出した指だから…？
男　３。
女　はい…。

つまり、タネが分かってしまえば馬鹿みたいに簡単なクイズであった。

男　フザケンナヨ！！！
……何これ……何してんの俺…何ナイフなんか持っちゃってんの…？　どっから出てきたのこのナイフは？　一番平凡でやっちゃいけないパターンじゃん…。
なんでこんなことになったの…？…もうよくわかんない…

なにがなんだかよくわかんない…。なにすんの俺…。このま
ま刺しちゃうの？　刺しちゃうパターン…？　刺しちゃう
の？　そんな安易な展開でいいの？　本当に刺しちゃう
の？

と、ナイフを向けながら、女に向かって歩んでいる。
女は、すくんで動けない。
ナイフが、女の腕にゆっくりと突き刺さっていく。

女　!ぶぶぶぶぶぶぶぶぷぷぷぷぷぷ

暗転。
女の叫び声。

女　いいいいいいっっっっってえええええええええええ

［ 4 ］

女の腕（刺された箇所）に、絆創膏が貼られてある。
全く大した傷ではなかったことが分かる。
男は、女の足元からオシメを脱がしている。
女は、手をタオルで拭いている。
男は、女からタオルを受け取り、オシメとまとめて、
ビニール袋に入れる。きつく縛って奥に置いてくる。
両者、心身共に疲弊した、重く静かな空気。

男　…なんか俺、試されてるみたいすね…。
女　これがなにか、神様が用意したゲームみたいなもので、
男　「こういう時、君はどうするかね？」みたいな。俺の人間性チェックゲームみたいな…。（女に）神様の一味じゃないですよね？
女　残念ながら。
男　はい。
女　あー、失格っすね。俺ゲーム失格すね。
男　失格だね。
女　はい。
男　もう、終わりにしません？　ゲームオーバーにしません？
女　これ以上こうしていても、悪い方向にしか行かない気がする。
男　課金しても課金してもクリアできない課金地獄にハマってるみたいなもんよ。
女　かと言って、こうなった以上、解決策がないんですよ…。
男　あなたを助けても、俺は罪人だし。殺してもそんなの絶対捕まるだろうし。殺す気なんて全くないですけど。なんで、殺す人って殺しちゃうんだろう…。殺すって、殺しちゃうって、そんなひどい話ないですよ…。
女　そうなると、この事態が好転する解決策は、一つしかないんですよ。
男　…なんですか？
女　なんだと思います？
男　…私の記憶をなくすとか？
女　どうやって？
男　わからないですけど。
女　そんなんじゃないです。もっと全然いいことなんですけど。ありえないことですから…。

長い沈黙。
男の耳に蚊がたかる。手で払う。

女　（腕）大した傷じゃなくて良かったです。一瞬どこまで刺さ

男　れるんだろうと思いましたけど。
刺す瞬間も俺考えてました…。どれだけ刺したら平凡なんだろう、どこをどう刺したら斬新なんだろうって…。
もはや、無心で行動することが出来なくなってしまっているんですよ…。

長い沈黙。
男、耳に再び蚊。
男、蚊を仕留めて、手に付いたそれをボーっと眺めている。

女　……私、お尻拭きながら、ちょっと考えていたんです。
汚いですけど、ダイちゃんがアイディアの種だったみたいに、ダイちゃん？
男　だいちゃん。
女　、、あ、大ちゃん。じゃあこっちは、
男　ショウちゃん。
女　かわいいっすね。
男　当たり前でしょ自分の体から生まれてんだから。ダイちゃん出た瞬間に、ちょっと浮かんだんです。あなたのお話の続き。って、素人の考えたことなんで、全然聞き流してもらっていいんですけど。
女　男は、女の向こうに、恋人の存在を感じながらも、そこは触れずに、ただ静かに作業を続けるんです。
男　女も、いつしか、自分の気持ちが誰に向いているかに気づき始めるんです。
女　でも、お互いに、絶対にそれは口にしないんです。
男　ただ、その髪の毛を解いている間の、体が近寄るその数時間を静かに喜び、過ごす２人。
女　そして、作業が進めば進むほど、近づいてくる別れの時。
男　ある日、いつものように、
女　「また明日」と、一言だけ言って帰っていく男。
男　「また明日」と、その明日を楽しみにして見送る女。
女　でも男は、その直後、不慮の事故に遭い、亡くなってしまうんです。
男　女は、そんなことはつゆ知らず、体でも壊したのかと、ただ来る日も来る日も、男の来るのを待ち続ける……。
女　って、そんな感じなんですけど、すいません…。

男、泣いている。

男　（慌てて）ごめんなさい、素人がパクッていいすか…。そのまま、パクらせてもらってもいい

女　すか
男　…え、はい…。というか、使えるようでしたら、喜んでどうぞ使ってください。
女　感動したのか…何なのか…涙が止まらんすぅぅー…
男　（そんな男をしばし見つめて）
女　…電話取ってもらっていい？

男、泣きながら電話を渡す。
女、電話をかける。

女　あ、先輩？　夜遅くにすいません、今大丈夫ですか？　すいません、いつも急に。はい、あのですね、あのー…、涙ってどうやって止めるんすかね？
男　あ、そうですか、いや～さすがですね、考える事がでかいです。はい、どうもありがとうございます。失礼します。ちゅす。
女　（電話を切る）
男　林先輩、なんて？
女　泣きやむまで泣きゃあいいんだよって。泣き止むまで泣いた時、それが涙が止まる時って。
男　すげえな林先輩（さらに泣く）。
女　…私、なんで林先輩にずっとボコられてたのかと言うと、林先輩、自分を頼れって、ボコってきたんです。自分を一生頼りにするならボコるのをやめてやるって。そういうことなんです。だから、これは、暴力に屈した上での頼りなんです。イジメなんです。一生続くイジメなんです。
男　私は、ボコられない為に、一生、あの美しき飛べない鳥と、関わっていかないといけないんです。
女　…（泣きやんで）「関わっていかないといけない」って部分を、もっと前向きな言葉に言い換えられませんか？
男　ん？
女　あの飛べない鳥と……鳥と……、お、お、お手手つないで歩く。
男　ダメだ、俺才能ないんで無理ですけど、そういう、なんか、少し楽しげな。
女　楽しげ…。
男　あの、美しき飛べない鳥と、踊る…
女　……
男　私は、別にもう、林先輩とのこの関係が、この先ずっと続くのも、あの美しき飛べない鳥と踊り続けるのも、もういいんですけど、
女　林先輩の方は、一生、私の偽りの頼りを、単に暴力に屈しているだけの、この嘘の頼りを支えに生きていくというのが、

男　申し訳なくて…。
女　いいんだよそれで。
男　林先輩はそれで幸せなんだから。立派な人助けだよ。
女　偽りで人を助けても…
男　いいんだよ。いいんだってそれで。
女　でも、
男　いいんだって。
女　でも、
男　いいんだって。
女　だって、
男　いいんだよ。
女　だって偽り、
男　ううん
女　だって嘘、
男　ううん
女　先輩は、
男　いいんだよ。いいの。いいのよ。
女　…
男　酷い世の中なんだから。
女　偽りの助けだろうと、助けがあるだけで、
男　それは…、それはとても素晴らしい事なんだよ。

話しながら、いつの間にか、男は女に近寄り、唇を重ねていた。
長い口づけ。
やがて唇が離れ、

女　……え？
男　（晴れやかに）ずっと考えてた。ここに、男と女、二人っきりになった瞬間からずっと考えてた。キスするのだろうか。しないのだろうか。するとしたら、どういう展開でするのだろうかって。こういう展開でとは想像だにしなかった。そしてキスが、俺が唯一考えていた解決策だった。絶対にあり得ないことだと思っていたけど、あり得た。
女　いや、
男　歌にするのもありかもと思った。

唐突に歌い始める男。
「酷い世の中なんだから
偽りの助けだろうと　助けがあるだけで
それは　それはとても素晴らしい事なんだよ♪」

途中から女も歌に加わり、ハモったりした。

歌い終えて。

女　・・・え？
男　ちょっと、一時間ほど散歩してきますね。（腕時計を見て）一時間ってことは、日付が変わって明日になるから、また明日来ます、みたいな。電話も置いておくし、髪を切りたい場合のためにハサミも置いておくし、ちょっと深呼吸して考えたい場合の為に、煙草も置いておくし、好きにしてください（と、携帯とハサミと自分の煙草を女の近くに置く）。戻ってきて、あなたがまだ居たら相当嬉しいですけど、居なかったら居なかったで、むしろそれが当然の事なんで。はい。

男は出口へと向かい、
どこか、別れを惜しむかのような静かな時間。

男　じゃあ……、
女　…また明日…
　　…また明日…

男、出ていく。
少しの間。
銃声のような大きな音が一発。
女、一瞬振り向くも、さして気にしない。
女一人、立っている。
女の携帯電話が鳴る。表示を見て、

女　林先輩…。（出る）あ、先輩どうもです。

電話をしている林先輩の姿。ジャージを着ている。

林先輩　おう、起きてた？　遅くにごめんな。どう？　涙止まった？だろ？泣きやむまで涙は止まらないんだよ。そうそう、ガソリンがなくなるまで車は止まらないのと同じよ。そう。あ、でさ、林さ、拳銃を拾ったっていうじゃない。そう、拾ったのよ。落ちてるもんなんだな。初めて拾った物の一つよ、拳銃。うん、それでさ、林、やっぱり撃ってみるもんじゃない？　そう、林は撃つのよ。そう、さっき。あ、聞こえた？それ林の音よ。うん、そしたらさ、ビルから出てきた男が倒れたのよ。林思うに、あれ命中したと思うのよね、倒れたから。倒れたし、頭から血が出てたから。だからこれ、林、多分、人を殺しちゃったと思うのよ。うん。だからこれ、さすがの林にも、もうどうにもできないからさ、誰かに何か聞かれても、林が拳銃拾ったとか言わないで欲しいのよ。林が犯

人だって思われちゃうから。その言わないでって念押しのために電話したのよ。うん、頼むわ。

女　あともう一ついい？　林さ、来週からヨーロッパ行くことになったのよ。それがさ、林もよく知らなかったんだけど、林、ピアノの才能がめちゃくちゃあるんだって。超天才なんだって。ありえないんだって。林も確かにピアノとは、出会った時から初めてじゃない気がしてたのよ。実際、自動演奏ピアノを初めて街中で見かけた時に、いきなりそのの鍵盤の動きに指が合ったよね。そんなこんなで、ピアノのコンクール的な用事で、ヨーロッパ行ってくるのよ。林正直ちょっとビビってるよ、異邦人の大陸なんて初めてだから。もしかしたら林が通用しないかもしれない異邦人の大陸では。そんなことない？　そうだよな。でまあ、ついでに、拳銃もここに置いてたら足がつくかも知れないから、一緒に持っていって、ヨーロッパで捨ててこようと思って。ん？空港で見つかる？　いや、林そんなドジじゃねーよ？　ちゃんとタオルに包んで鞄の奥の方に隠すよ？　お、じゃあ、そんだけだから。（切る）

女　ちょ、先輩っ、拳銃それだと、

林先輩、去る。

電話を見つめている女。

軽くため息をつき、男が置いていった煙草に手を伸ばす。

煙草をくわえる。

ライターをカチャカチャ。オイル切れか、火が付かない。何度かやって諦める。

ボーっとしている。

ボーっとしている。

女　（小さくため息）久々に会うか…

女は、先輩の拳銃を止めるべくか、ハサミに手を伸ばす。

ピアノの音。

素晴らしく華麗な演奏。

おわり